

吾輩は魴である。学名はまだ無い。
どこで生れたか頓と見當がつかぬ。
何でも突然変異のご先祖様を

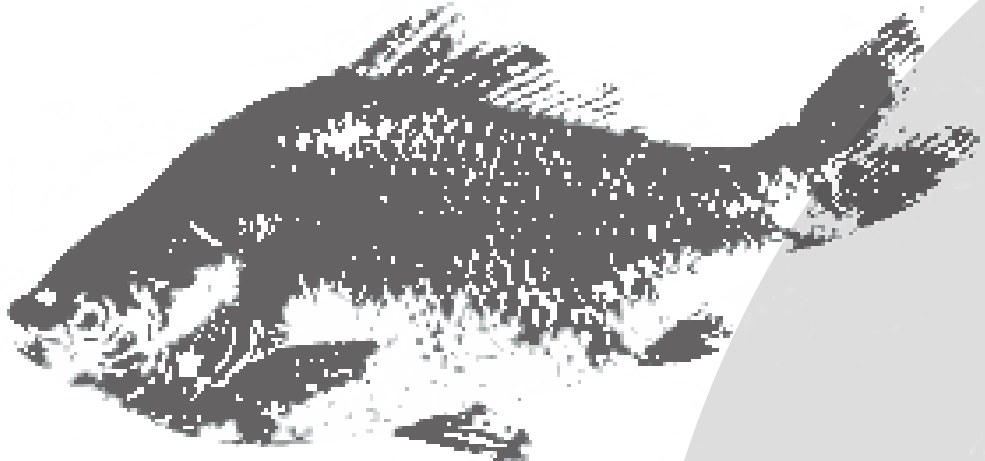
人間といふものが勝手に
増やしたのが始であつたさうだ。

その後魴にもだいぶ逢つたが
げんごろうぶなには

一度も出会わした事がない。

のみならずへらぶなといへば
どうも煙たがられ実に弱つた。

これが吾輩の持つ宿命といふものである事は
やうやくこの頃知つた。



【ゲンゴロウブナ 改 = Carassius cuvieri χ 】
(Carassius cuvieri Temminck and Schlegel)

フナ属の**属名**（生物の学名は原則、旧世界共通言語としてのラテン語）は **Carassius** であるが、英語では **Crucian carp**。
ところがヨーロッパでは、ヨーロッパブナ = Carassius carassius という学名の固有種を、属名である筈の Crucian carp と呼ぶらしく混乱する。
地元のフナの学名を「フナの中のフナ？」と名付けるあたり、広く人々に愛された魚種だと推察できるが、やがて世界共通（支配）言語となった英語表記に置き換わっていった経緯には興味をそそられる。ただ、それが種でなく属名であることは、英国に対する他のヨーロッパ諸国の捨てきらぬプライドの表れなのかもしれない。即ちフナの代名詞といえやはりヨーロッパブナであると、ヨーロッパ人は言っているのだ。
だからつまり、
日本人の我々が、ヘラブナのことを Crucian carp と属名で呼んでも構わない。むしろ琵琶湖周辺の方々にとり「ゲンゴロウブナとヘラブナは違う」という意識が強ければ、種としての学名が無い以上、属名で呼ぶのが正しいのかもしれない。**心の故郷であったマブナが、いつの間にかヘラブナに取って代わられた罪を許せない**方々には受け入れられないかもしれないが、**現代のフナ釣り**といえ**ば、日本ではヘラブナ釣りを指すのは**否めない事実。
同じヘラブナでも河内魴や近江魴などそれぞれの地域で親しまれた呼び名があり、さらにゲンゴロウブナと同じようにヘラブナとの差異を主張する者も居るが、全国的に見ればやはり、ヘラブナという呼び名が市民権を得たことは明らかだ。ちなみに緋魴を品種改良により定着させた金魚や、イノシシを家畜化したブタには学名があるが、あまりにも歴史の深度が違う。ブタにならえば**遠い将来**、ヘラブナの学名は Carassius cuvieri domesticus になると考えられるものの、それまで**ヘラブナ釣りが存続しているか大いに疑問**である。もっとも、ヘラブナ釣りが廃れようが、ヘラブナ自体は残る。生命は人間の思惑を超えた次元でクローンを作ろうとする。他の外来種同様、自然繁殖した個体を根絶することは不可能だ。
(乱獲で絶滅した生物もこの世には沢山居ますが、異常なことではないのでしょうか……)

さて、**人間が創り出した種ならば、乱暴に扱っても良いのでしょうか。**ヘラブナは、消費者を喜ばせるためだけの単なる商品、消耗品なのでしょう。非対象魚の命はゴミでしょうか。私的な管理池であろうが湖沼や河川であろうが、皆ひたむきに生きる生命です。綺麗事と現実の狭間で、いま一度自問自答してみませんか。**ヘラブナ釣りは哲学**です。**マブナを駆逐する勢いで放たれたヘラブナも、自我に彷徨う被害者側**に、マブナと共に立っているのです。彼ら彼女らに罪はありません。

現代のヘラ師も、未成熟な社会のハンターと同じように、何かを見失ってはいないのでしょうか。**ヘラブナとのフェアな会話、出来てますか。**やれば釣れるのが判りきっている方法で、沢山釣って楽しいのでしょうか。そんな方法論の中にも、上手下手の差が生まれることは理解できます。でもそこは、追求すべき本質とはかけ離れた世界なのではないのでしょうか。素手でなくグローブを装着するからボクシングもスポーツなのではないのでしょうか。先人たちもそのように考えて作ったであろう様々な釣り規定の中に、いまや形骸化し逆におかしな世界を生み出しているものも少なくありません。**役目を終えたルールは、見直されるべきです。**
「**他者に勝つ**」こと「**だけ**」が**アイデンティティ**というのは、**とても幼く脆い**解決方法です。その時期は人それぞれですが、選手生命を全うした晩に、何が残るというのでしょうか。ヘラブナ釣りに限らず、**釣りはそんな薄っぺらいものでは無い筈**です。

私たちフナピーは、プロトーナメントが存在する訳でもない現在、釣果至上主義から一步引き、カネにモノを言わせる高級指向にも疑問符を打ち、**ヘラブナ釣りが人生を豊かにする遊びであることを**自覚し、ゆとりを持って楽しむ、**明確に未来を見据えたオトナをサポート**したいと思います。
高級な道具も悪くありませんが、**本質を知らぬまま他人の評価に踊らされるアングラーは、趣味人とは言えない**など、私たちは思うのです。
時には釣果を競うのもアリでしょう。それも遊び方のひとつですし、競技がヘラブナ釣り技術を発展させたことは疑いようの無い事実です。

私たちフナピーはそもそも、消費者による消費者のための、「志ある、ないものねだり」から始まった利益マイナスの完全ボランティアなプロジェクトです。
参加スタッフに無理のない永続的な活動のため、将来的には法人化を目指しますが、常にアングラー目線を忘れず、利益追求に走り過ぎず、流行を追わず、ほんとうに意味のあるもの、**将来にわたって価値を提供し続けられるものを、世に送り出してゆきたい**と考えています。

参考 <https://ja.wikipedia.org/wiki/フナ>